慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）12111（大代表）

慶應義塾大学病院・三四会・慶應医学会

100年合同記念式典・シンポジウム開催

１年遅れのＷＥＢ開催ながら華やかに

記念式典・シンポジウムの参加者たちが一同に会して

慶應義塾大学病院・三四会・慶應医学会はいずれも1920年に創立されており、昨年100周年を迎えた。昨年11月に100周年合同記念会を明治記念館で開催予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大により、今年に延期されていた。これを受けて、2021年9月11日に三田キャンパス南校舎ホールにて、慶應義塾大学病院・三四会・慶應医学会100年合同記念式典・シンポジウムが開催された。今年もコロナ感染状況が改善しない中、現地での参加者は伊藤塾長を始め、式辞、座長、演者など登壇される方25名程度に制限され、720余名の事前登録者はWEBでの参加となった。

現地には退職されて久しぶりにお会いする大先輩たちも多くおられ、懐かしい思いがした。会に先立ち、諸先輩方と共に現地参加者全員で記念撮影が行われ、マスク姿ではあったが100周年に相応しい華やかな写真撮影になった。

100周年会は、式典とシンポジウムの2部構成で行われた。

〈記念式典〉

式典は、アナウンサーの小川彩佳さんの司会で始まり、まず病院の記念ムービーが流された。東京オリンピックが開催されたばかりの新国立競技場と新病院をドローンで空から俯瞰撮影した動画で始まり、北里柴三郎の教え通り、いつの時代も基礎・臨床一体型医学・医療の実現を理念として歩んできたこと、次の100年に向かって教職員一丸となって邁進することが伝えられた。続いて三四会の記念ムービーが流された。新棟建設などの募金活動、医学部新聞、三四会会員名簿作成、連合三田会活動、赤倉アカデミー、三四会賞などの様々な活動が紹介された。背景には学外で活躍する会員や各支部会の集合写真が流れ、三四会が世代を超えた交流の場として活用されていることを改めて実感した。

続いて式辞に移り、まず伊藤公平塾長からは、医学部の次の100年の飛躍のために医学部から3人の方に塾の理事に入ってもらっていること、三四会員には新型コロナウイルスワクチン職域接種において大変お世話になったことへの御礼、医学会のKeio Journal of Medicineは理工学部、薬学部、看護医療学部も編集委員会に加わりオール慶應の医学誌として発展していることへの賛辞が述べられた。

その後、病院を代表して松本守雄病院長、三四会を代表して武田純三会長、医学会を代表して天谷雅行会長、そして来賓挨拶として連合三田会の菅沼安嬉子会長、学校法人北里研究所の小林弘祐理事長から祝辞を頂き、閉会となった。

〈シンポジウム〉

シンポジウムは〝次の100年へ For the Next 100 years〟と題して、北川雄光常任理事より開会の挨拶を頂いた。シンポジウムは3部構成で、座長は歴代の医学部長、病院長をお勤めになった錚々たる先生方が担ってくださった。

第1部『次世代を見据えた医療と人材育成』は、座長を名誉教授の戸山芳昭先生と池田康夫先生が務められ、救急医学教室の佐々木淳一教授、放射線科学教室の筆者、医学教育統轄センターの門川俊明教授が演者を務めた。

第2部『世界を先導する最先端の慶應医学』は、猿田享男名誉教授、医化学教室の末松誠教授、竹内勤名誉教授が座長を務められ、リウマチ・膠原病の金子祐子教授、生理学教室の岡野栄之教授、先端医科学研究所遺伝子制御研究部門の佐谷秀行教授が演者を務められた。

第3部『慶應医学のあゆみとその先』は、座長を名誉教授の村井勝先生と相川直樹先生が務められ、演者は山内慶太常任理事と宇宙飛行士の向井千秋先生からお話を頂いた。各演者の講演内容は、紙面の都合で次頁の各演者の要旨をご覧になって頂きたい。最後に、金井隆典医学部長が100年後の後輩たちに語りかけるユーモアのある閉会の辞を述べられ、終了となった。

200周年を迎える方々が見ても、100年目の慶應医学の状況がよくわかり、かつ心に響く記念会であったと思う。

（放射線科学教室（診断）教授　陣崎雅弘　66回）

小林弘祐理事長

菅沼安嬉子会長

伊藤公平塾長

三四会の記念ムービーも上映

【シンポジウムの講演要旨については2面以降に掲載】

慶應義塾大学病院開院百年に寄せて

慶應義塾大学病院長　松本　守雄（65回）

新型コロナウイルス感染症の影響で1年遅れのオンラインでの開催となりましたが、このたび節目となる100年の記念の会を迎えることができ誠に喜ばしく思います。

慶應義塾大学病院は1920年11月6日に北里柴三郎博士を初代病院長として当時の東京市四谷区西信濃町に開院いたしました。北里博士は医学部開校・病院開院式において福澤先生より受けた恩顧に感謝を述べるとともに「各科の分立を防ぎ、基礎医学と臨床医学の連携を緊密にし、学内は融合して一家族の如く、全員挙（こぞ）って医学の研鑽に努める」ことを理念に掲げました。開院時は木造2階建、約200病室、500名収容の規模でしたが、当時本邦随一の評判を得たとされています。以来慶應病院は東京大空襲による焼失など幾多の困難な時期を乗り越えつつ、北里博士の理念を100年にわたり脈々と受け継ぎ、国内外からも高く評価される病院となりました。病院の発展に多大なるご尽力をされた多くの先人の方々に心より敬意を表したいと思います。

現在、慶應病院では31の診療科が互いの垣根を無くし、すべての職種が協力して患者の方々に質の高いチーム医療を提供しています。治療が極めて困難ながん、免疫、遺伝などによる難治性疾患に対しては複数の診療科の専門家チームからなるクラスター部門が高度な医療を行っています。2016年には厚生労働省により私立大学病院としては第一号となる臨床研究中核病院に認定され、基礎と臨床が連携しつつ先進的な臨床研究を行い、その成果を患者の皆さんに届ける取り組みが活発に行われています。がんゲノム医療中核拠点病院および内閣府のAIホスピタルモデル病院にも認定され、次世代の医療の推進に精力的に取り組んでいます。さらに、東京2020オリンピック・パラリンピックのメイン会場である新国立競技場に隣接する病院として、会場医療の提供や要人対応を行うなど社会貢献にもしっかりと取り組んでいます。

2018年には慶應社中の皆様の多大なるご支援を頂き、1号館Ⅱ期棟が完成し、1986年に完成した2号館の改修を行いつつ、来年春にはエントランス棟や外構も整備され文字通りのグランドオープンを迎えます。まさに世界に冠たる総合医学府を目指す慶應医学の基幹病院として患者の皆さんに慶應らしく質の高い心の通った医療を提供できることは教職員にとりましても大きな喜びです。一方で、このような素晴らしい医療施設を用意して頂いた以上、慶應医学を医療、研究、教育、イノベーションの分野で発展させ、人類の福祉に貢献することは我々に課せられた大きな使命でもあります。新しい医療を切り開いていく舞台として慶應病院が次の100年に向けて発展していけるよう教職員一丸となって努力を続けたいと思います。

最後になりますが、100年合同記念式典・シンポジウムの開催にご支援・ご尽力を頂いた皆様に感謝を申し上げます。

百年に寄せて～慶應醫学と三四会～

三四会長　武田　純三（52回）

三四会は、1920年1月29日に北里先生を招いて発会式を催し、学生の活動として走り出します。発会当時の目的は『会員相互の交誼を厚くし心身の強健をはかること』でしたが、現在の会則では『医学部と密接な連携を保ち、会員相互の親睦、医学医術の研鑽に努め、福澤、北里両先生建学の訓えを体して慶應医学の隆盛発展に寄与すること』と謳っています。

信濃町での本科の開始は1919年4月16日の始業式です。この時北里先生は、『日本の医学界は長く官学の独占する所なりしが、近来私立の専門学校も起り、民間に於ても医学の研究盛んとなり、遂に慶應義塾にも医学科創設せらるゝに至りしは本邦医学界の為に慶す可き事なり。』と挨拶されています。慶應義塾が翌1920年4月に大学令に基づく大学となることで医学科が医学部となり、研究科の設置が義務付けられます。研究成果の発表の場である慶應医学会の設立は、大学にとって必須であったと思われます。1921年1月に雑誌「慶應醫学」が発刊されます。

同時に4月からは、臨床科目の講義が始まります。それに合わせて臨床の教室が設立されていきます。また、病院の設計に当たって北里先生は、

・堂々たる建築を避け、入口なども病衣人の出入りに便利になるようにすること

・診療各科の連絡をよくし、患者が各科の診療室を訪うに便利にすること

と指示しています。診療は、病院の開院式を待たずして、出来上がった建物を利用して開始されていきました。11月6日（土）には、開校・開院式を迎えます。義塾の根幹ともいえる社中の協力に、北里の訓えである基礎医学と臨床医学、診療科間の連携などの横への繋がりを背景に、臨床、教育、研究の体制がそろい、『慶應醫学』が誕生します。

戦争により学生の活動が制限され、卒業生の人数が増えてきたことなどから、学生の活動から同窓会へと移行していきました。色々な職業に就いている同門の同窓会とは異なり、三四会会員は全て医師か歯科医師で、医療に携わっています。また、慶應では全国に関連病院が広がっており、臨床教育が信濃町の医学部・病院だけでなく、関連病院でも行われます。先輩が後輩を、後輩がさらに後輩を教えてきました。三四会は教育の場であり、診療の連携の手段となっていきます。

社中の横の繋がりと、医学部から同窓会へと世代を超えての縦の連携が絡み合って慶應醫学が成長してきました。百年積み重ねによる団結力の強さが、三四会の誇りであります。

三四会は慶應醫学を支えてきましたし、慶應醫学が三四会の結束を強めてきました。「慶應医学の隆盛発展に寄与する」は、この先も変わることのない三四会の目的です。

慶應医学会創立百年に寄せて

慶應医学会会長　天谷　雅行（64回）

慶應医学会は、1917年医学部が開設された3年後、1920年に創立されました。当時は「慶應医学会」と「慶應医学社」として創立され、1928年に両者は合併されています。第1回慶應医学会総会が1920年11月8日に医学部信濃町キャンパスにおいて開催され、この日の総会において会則、役員の決定などが行われました。以後、2度の世界大戦により学会活動は途絶えたこともありましたが、慶應医学会は、「医学の進歩と啓発を図ること」を目的として、慶應医学部の事業の一部を展開する形で、医学部とともに発展して、2020年に創立100年を迎えました。2021年現在、慶應医学会は、慶應義塾大学医学部・大学院医学研究科の教員、大学院生をはじめとして様々な団体・機関の約4000人の会員により構成されています。

慶應医学会の大切な事業のひとつに、公式学会誌の発刊があります。1921年に、「慶應医学」の第1巻第1号が、慶應医学社より創刊されました。医学に関する最新の学術知識および情報の公開および共有を目的として、特別寄稿、総説、講座、原著、学位論文など、数多くの優れた慶應医学の発展に貢献する業績が発表されました。医学部の財務改革施策、若手医師支援策の一環により、2009年、第85巻第2号を最後に休刊となりました。

「慶應医学」の休刊に伴い、1952年に創刊された「The Keio Journal of Medicine」が、2008年より、慶應医学会のオフィシャル・ジャーナルとなり、国際化により力をいれて行くことになります。2019年より、理工学部、看護医療学部、薬学部の方々が編集委員に加わり、対象論文をMedicineから、Life Scienceの分野へ拡大しました。さらに、Online Journalへの移行、Impact Factorの獲得を目指して、進化を続けています。

慶應医学会のもうひとつの大切な事業に、年1回の総会・シンポジウム、年50回程度随時開催される例会があります。総会・シンポジウムでは、その時々で最も関心の高いテーマが選ばれ、ノーベル賞受賞者を始め第一線の研究者が講演者となり、最先端の医学、生命科学を議論する貴重な機会を提供してきました。2020年、COVID-19のパンデミックにより、病院・三四会・医学会の合同シンポジウムが延期された際も、新型コロナウイルス感染症に関するシンポジウムがWEB開催され、生配信されました。

慶應医学会最高賞として、明確な臨床応用を見据えたin vivo実験医学において、世界に真価を問う斬新な医学研究を対象として、2014年「野村達次賞」が設立されました。以後、慶應医学の目指す「臨床医学に貢献する基礎医学」に貢献した若手研究者が顕彰されています。

次の100年に向けて、慶應医学会が益々発展し、世界の先導者となる多くの若手研究者を輩出する基盤となり続けることを祈念しています。

三四会員各位

慶應義塾大学病院ならびに慶應医学会と合同で計画しておりました100年記念式典・シンポジウムは、１年遅れのＷＥＢでの開催となりましたが、9月11日（土）14時より、約700名の参加登録をいただいて開催することができました。これもひとえに会員諸氏のご協力の賜物と御礼申し上げます。会の詳細は、医学部新聞の記事をご覧ください。

三四会は、この先百年も〝慶應醫学の隆盛発展に寄与する〟ことを目指して活動してまいりますので、会員の先生方のご支援をお願い申し上げます。

三四会会長　武田純三

三四会より

「情報発信方法の希望に関するアンケート」ご協力のお願い

現在、三四会では今後の会員の皆様への情報発信を強化していくため、発信方法の検討を進めております。つきましては、簡単なウェブアンケートをご用意致しましたので、以下のQRコードよりご回答頂けますと幸いです（所要時間は2-3分です）。

情報発信がより活発に行われ、会員同士のコミュニケーションも深まっていくように検討を重ねたいと存じます。何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

三田キャンパスワクチン接種終了のご報告

三四会として医師の派遣に協力してまいりました三田キャンパスでの〝ワクチン接種〟に関して、慶應義塾新型コロナウイルス感染症対策本部より、接種が完了した旨の通知が、塾より出されました。

『６月21日（月）から大規模な新型コロナウイルスワクチンの職域接種会場を三田キャンパス南校舎に設置していましたが、先週をもって終了しました。

９月３日（金）までに、学生・教職員、キャンパスで働く委託企業等の方に加えて、他大学等の学生・教職員の方を対象に合計でおよそ49,000人への２回のワクチン接種が完了しています。

今回の職域接種会場での１回目接種者の２回目接種率は98.7％となりました。』

慶應義塾大学医学部三四会
会長　武田　純三

2021年度
坂口光洋記念 慶應義塾医学振興基金 医学研究奨励事業

慶應医学賞 ライジング・スター賞
候補者募集

★公募内容
慶應医学賞 ライジング・スター賞　２件（１件につき副賞100万円授与）
対象課題：自由

★審査基準
・過去数年間に医学の領域において顕著な業績を挙げた研究者
・卓越した業績を有すること、および、候補者が指導性をもって研究体制を構築し、活動を行っていることを重視する

★対象者
・博士号を有する、またはそれに相当する業績があること
・慶應義塾大学医学部三四会員または慶應義塾大学医学部に所属する者（三四会員資格については http://www.sanshikai.jp/gaiyou/kaisoku.html会則第6条2項を参照）
・過去に医学振興基金医学研究奨励賞または慶應医学賞 ライジング・スター賞を受賞した者は応募不可。但し、過去に落選した者の再応募は差し支えない
・2021年9月1日時点で45歳以下
（但し、ライフイベント等の考慮すべき事情がある場合はこの限りでない。申請書「3.備考欄」に記載のこと）
・推薦者は自薦・他薦ともに可。他薦の場合、同一推薦者から複数名推薦可能

★締切：2021年10月20日（水）正午必着
・申請書類および申請方法は、下記の当基金HPをご参照ください。
・当基金の医学研究奨励事業委員会で審査、結果は2021年12月上旬頃に通知致します。また、2022年1月5日(水)の医学部新年祝賀式において受賞者の表彰ならびに、別途、受賞記念研究発表会を開催します。

お問い合わせ：医学振興基金事務室
E-mail: k-msf@adst.keio.ac.jp　Tel: 03-5363-3609
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地　総合医科学研究棟1S4）

鑑賞知来

新たな分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬の登場により、一部の悪性腫瘍は制御可能となり、C型肝炎も新たな抗ウイルス薬により、内服薬で完治する過去の病気になりつつある。このように医療に革新的な進歩をもたらす創薬研究に魅了され、2011年にご縁があり薬学部へ移籍し、早いもので10年が経過した。

この間、薬学部の教員や学生達と共に創薬研究や薬学教育を進めてきたが、同時に日本の研究・開発環境をとりまく厳しい現実も肌で感じている。今回の新型コロナウイルスワクチンの開発が良い例であるが、欧米では、政府が多額の資金援助を行い、アカデミア発の研究シーズをバイオベンチャーが実用化し、製薬企業へ成長するといった好循環が生まれつつある一方で、日本ではまだそのような土壌が十分に育っていないのが現状である。このような状況を打破するためには、これまで以上に産官学が緊密に連携をとり、特に若い学生が学問や研究に興味を持ち、海外留学やベンチャー設立などに積極的にチャレンジできるような環境の整備が急務である。

そのような中、慶應義塾が全国の大学に先駆けて開始した新型コロナウイルスワクチンの職域接種は、医療系3学部が揃った慶應義塾ならではの素晴らしい取り組みであったと感じている。私も問診業務に参加させていただいたが、驚いたのは、義塾の学生や教職員のみならず、近隣の他大学の学生や留学生も広く受け入れていたことだ。もちろんワクチン接種は任意であるが、キャンパスで講義を受けられなかった学生や、海外留学を志していたのに中断せざるを得なかった学生にとって、大きな希望と安心感につながったと思う。

新型コロナウイルスの感染拡大は続いているが、若い学生が安心して勉強や研究に打ち込み、様々なことに積極的にチャレンジできるように、これからも医療・研究・教育の多方面から応援していきたい。

（慶應義塾大学薬学部薬物治療学講座　齋藤義正　75回）